

## 資料 2 東アジア五都市統計分析レポート

(2019年7月26日現在)

### I. データの概要

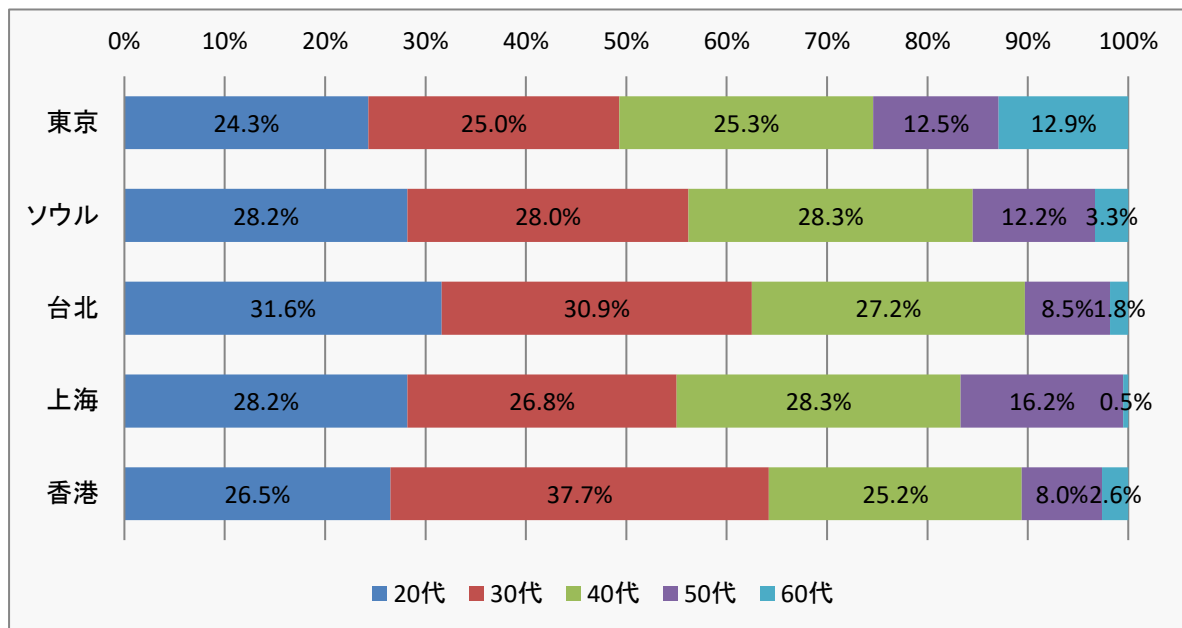
- サンプル条件（男性、年齢20-69歳、東京・ソウル・台北・上海・香港在住）
- サンプル数：全体5000名（東京1,000名、ソウル1,000名、台北1,000名、上海1,000名、香港1,000名）
- 委託先：株式会社インテージ
- 日本のデータはインテージにモニター登録をした方々に対してWEB調査を実施、他の東アジアの都市のデータはインテージが提携している海外の調査会社を通してWEB調査を実施。
- 調査年月日：2018年6月
- 統計分析手法：記述統計（クロス表・分散分析）・多変量解析（共分散構造分析 SEM）

### II. データの属性

#### 1. 年齢

各都市在住の対象者の平均年齢は高い順から東京が41.25歳、ソウルが37.96歳、上海が37.49歳、香港が36.47歳、台北が36.23歳で、東京の平均年齢が最も高く、台北が最も低い。図1にあるように、東京の場合は約半数（50.7%）が40・50・60代である。台北ではこの年齢層の対象者は37.5%であった。香港の40～60代も35.8%で比較的に若い年齢層に偏っている。

図 1 都市別 年代の分布(各都市 N=1000)

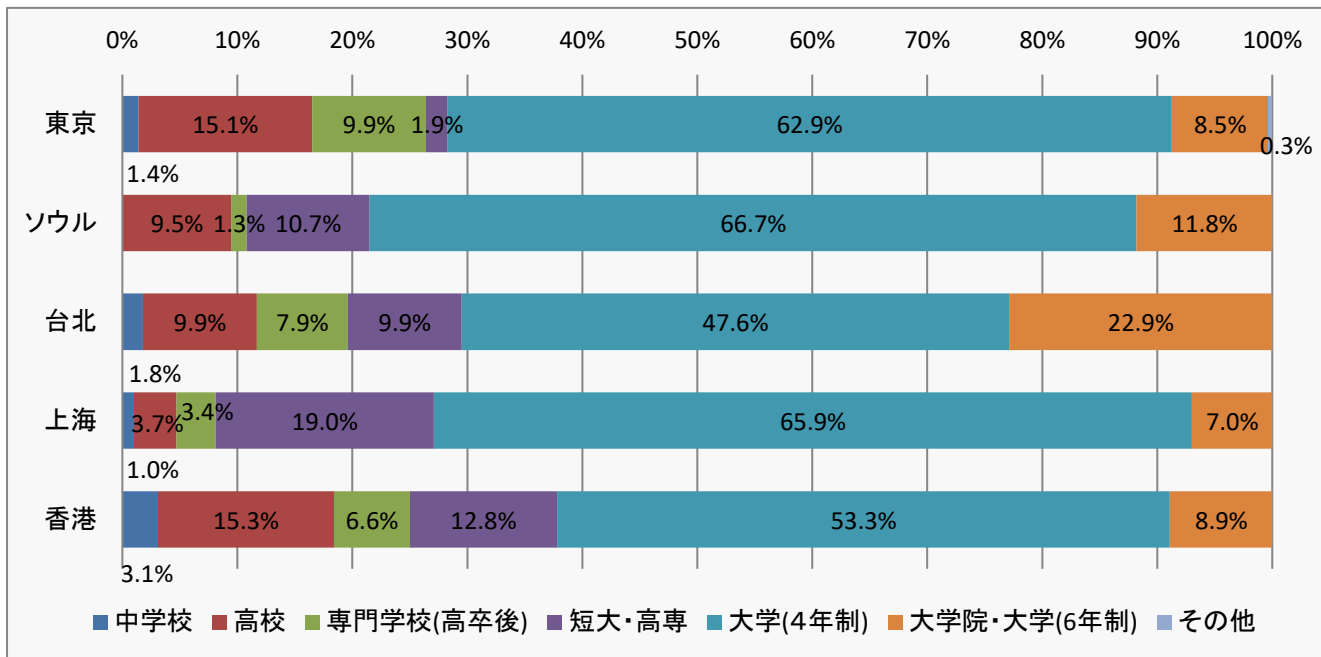


#### 2. 学歴(最終学歴)

最終学歴（図2）は全ての都市で大学卒（4年制）がもっとも多い。その中でも、ソウルでは66.7%、上海では65.9%、東京では62.9%と約6割であるが、香港は53.3%、台北は47.6%と約5割で、これらの都市の中では少ない傾向が見られる。大卒の次に多いのが東京と香港では高卒であり、ソウルと上海では短大・高専卒であった。台北では高卒と短大・高専卒は同程度である。高学歴層（大学院・6年制大学）を見ると、最も多かつ

たのは台北で22.9%、ソウルで11.8%であった。東京（8.5%）、上海（7.0%）、香港（8.9%）で、10%以下であった。しかし、各国で教育制度が異なるために、学歴の直接的な比較には注意が必要である。

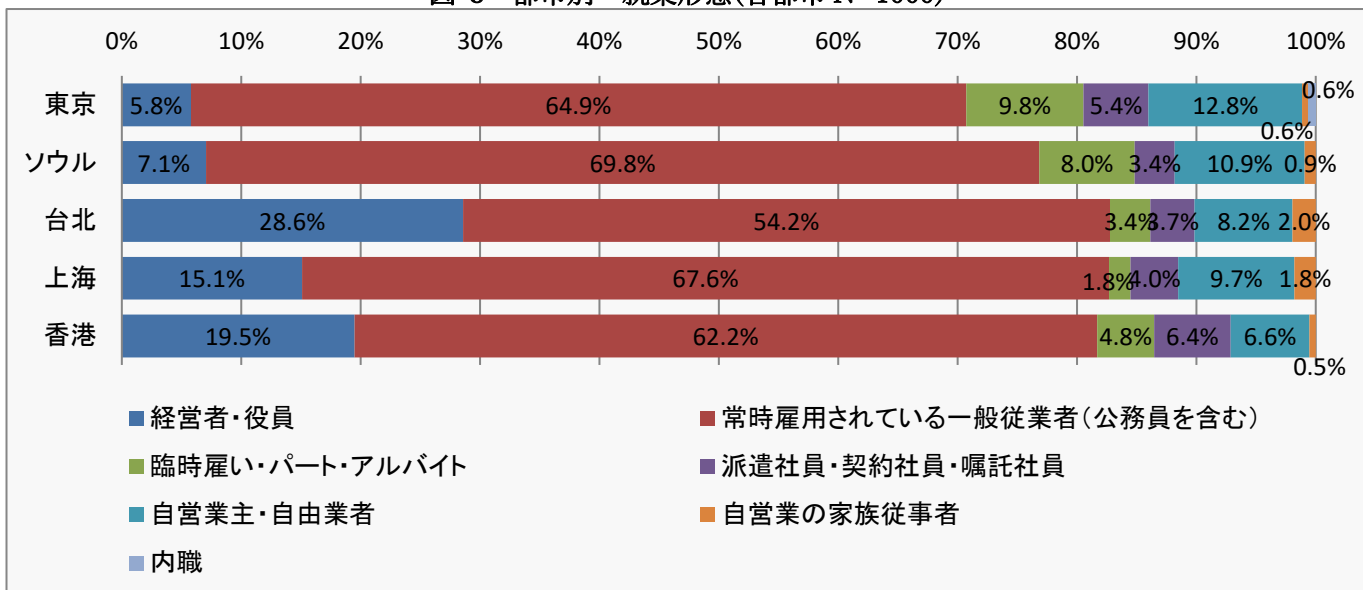
図 2 都市別 最終学歴(各都市 N=1000)



### 3. 雇用形態

図 3 に示したように、各都市で最も多い雇用形態（半数以上）は「常時雇用されている一般従業者（公務員を含む）」であり、多い順にソウルでは69.8%、上海では67.6%、東京では64.9%、香港では62.2%、台北では54.2%であった。次に多い雇用形態は各都市で異なるが、東京とソウルでは「自営業主、自由業者」（順に12.8%と10.9%）で、台北、上海、香港では「経営者・役員」（順に28.6%、15.1%、19.5%）である。また、「臨時雇い・パート・アルバイト」が最も多いのは東京（9.8%）、次いでソウル（8.0%）であった。

図 3 都市別 就業形態(各都市 N=1000)



#### 4. 労働時間

表1にあるように、全ての都市において、一日の平均労働時間は8時間台であり、長い順からソウル（8.75時間）、台北（8.73時間）、東京（8.50時間）、香港（8.31時間）、上海（8.17時間）である。ちなみに、東京以外の日本における地域の平均労働時間は約8.49時間であり東京とほとんど同程度である。

表1 都市別 平均労働時間

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
東京	841	8.4960	2.00475	.06913	8.3603	8.6317	.50	16.00
ソウル	823	8.7459	1.87699	.06543	8.6175	8.8744	.50	16.00
台北	887	8.7325	1.60220	.05380	8.6269	8.8381	.42	16.00
上海	931	8.1702	1.38253	.04531	8.0813	8.2592	.17	16.50
香港	905	8.3088	2.18898	.07276	8.1660	8.4516	.50	16.50
日本東京以外	3190	8.4894	1.90408	.03371	8.4233	8.5555	.25	16.50
合計	7577	8.4857	1.86844	.02146	8.4436	8.5278	.17	16.50

#### 5. 年収

調査票では年収についてカテゴリ別に問うたが、その平均値を見ると、東京では9.21(450～549万)、ソウルでは5.68(130～149万)、台北では6.17(150～249万)、上海では9.32(450～549万)、香港では9.26(450～549万)であった。また、既婚の男性に関しては、各回答を年収カテゴリの中心値に置き換え、「回答したくない」「わからない」の回答を欠損値として、平均値（現地通貨）を計算した。この平均値を本人と配偶者に分けて都市ごとに比較したのが表2（東京）、表3（ソウル）、表4（台北）、表5（上海）、表6（香港）である。更に、2018年8月30日時点での為替レート（1ウォン=0.1円、1台湾ドル=3.65円、1元=16.38円、1香港ドル=14.23円）を参考にして日本円に換算したので、以下では日本円で記すこととする。

まず、東京の既婚男性の平均年収は約501万であり、配偶者の場合は約200万円と半分以下である。ソウルは本人が約350万円で配偶者は215万円、台北は本人が413万円、配偶者が383万円、上海は本人が314万円で、配偶者が207万円、香港では本人が545万円で配偶者が406万円であった。よって、本人と配偶者の収入のギャップが一番多いのが東京であった。反対に、一番少ないのは台北である。

表2 本人と配偶者の年収（東京）

		本人の収入__	配偶者の収入__
		日本	日本
度数	有効	874	378
	欠損値	126	622
平均値		501.2243	200.5952
標準偏差		374.21072	271.75230

最小値	.00	.00
最大値	2500.00	2075.00

表3 本人と配偶者の年収入（ソウル）

		本人の収入__ ソウル	配偶者の収入__ ソウル
度数	有効	970	496
	欠損値	8030	8504
平均値		35090721.6500	21500000.0000
最小値		.00	.00
最大値		360000000.00	360000000.00

表4 本人と配偶者の年収入（台北）

		本人の収入__ 台北	配偶者の収入__ 台北
度数	有効	972	593
	欠損値	8028	8407
平均値		1131069.9590	1050337.2680
最小値		.00	.00
最大値		6000000.00	6000000.00

表5 本人と配偶者の年収入（上海）

		本人の収入__ 上海	配偶者の収入__ 上海
度数	有効	986	699
	欠損値	8014	8301
平均値		191835.6998	126252.5036
最小値		.00	.00
最大値		600000.00	600000.00

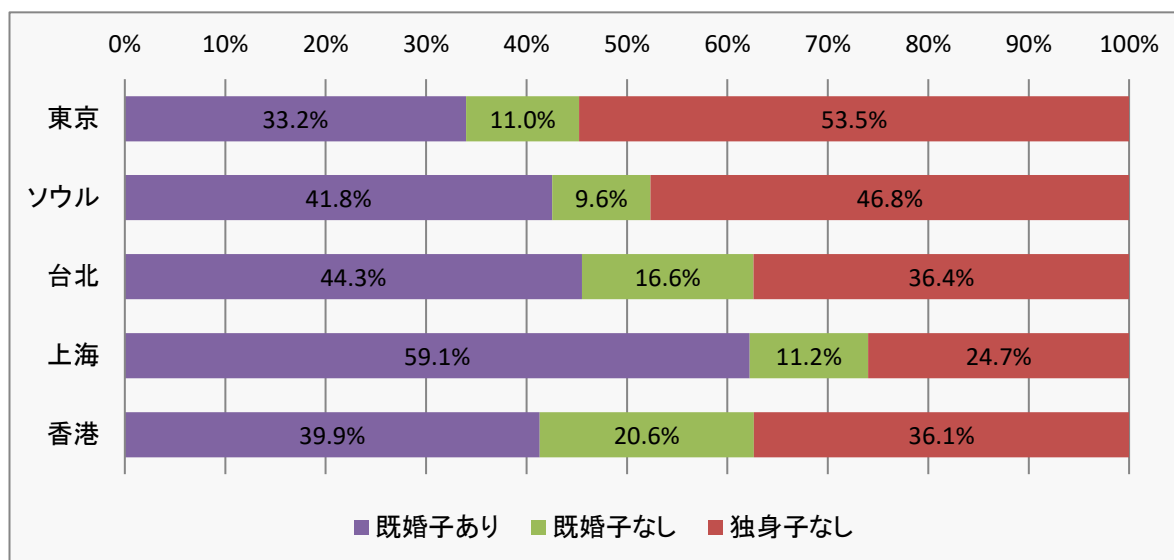
表6 本人と配偶者の年収入（香港）

		本人の収入__ 香港	配偶者の収入__ 香港
度数	有効	969	585
	欠損値	8031	8415
平均値		382793.6017	285569.2308
最小値		.00	.00
最大値		1200000.00	1200000.00

## 6. 婚姻状況と子どもの有無

最後に図4に示したように、東京とソウルでは「独身・子なし」が最も多く（順に53.5%、46.8%）、台北、上海、香港では「既婚・子あり」が最も多かった（順に44.3%、59.1%、39.9%）。5都市の中で、「既婚・子なし」が最も多かったのは香港の20.6%であり、次いで上海の11.2%、東京の11.0%である。また、図4には示していないが、「独身・子あり」の対象者が最も多かったのは上海（5.0%）、次いで香港（3.4%）であり、最も少ないのがソウル（1.8%）である。

図4 都市別 配偶関係と子どもの有無(各都市 N=1000)



## III. 記述統計（分散分析）

本項では調査票に含まれる主要変数について、都市間の差を分散分析により検定（シェッフエの多重比較）した結果を提示する。

### 1. 仕事での競争意識 [問6(ア)(イ)(ウ)から尺度を作成、平均値が高いほど、仕事での競争意識が高い。]

表7にあるように、仕事における競争意識（「業績を上げて評価されたい」「競争に勝ちたい」「男同士では自分と相手の上下関係を意識している」）の平均値を見ると、最も高いのは上海（10.04）であり、次いで台北（9.84）と香港（9.31）である。一番低いのは東京の8.05であった。また、東京とソウルと他の都市との差は統計的に有意であった。しかし、この尺度の中央値は6なので、全ての都市で、仕事での競争意識は高めであると言えるだろう。

表7 都市別 x 仕事での競争意識

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
東京	1000	8.0490	2.35673	.07453	7.9028	8.1952	3.00	12.00
ソウル	1000	8.8870	1.81976	.05755	8.7741	8.9999	3.00	12.00

台北	1000	9.8370	1.80934	.05722	9.7247	9.9493	3.00	12.00
上海	1000	10.0420	1.29534	.04096	9.9616	10.1224	3.00	12.00
香港	1000	9.3080	1.69765	.05368	9.2027	9.4133	3.00	12.00
合計	5000	9.2246	1.96126	.02774	9.1702	9.2790	3.00	12.00

**2. 職場における女性観** [問6 (エ)(オ)(カ)(ク)(ケ)から尺度を作成、平均値が高いほど、職場の女性観が伝統的である。]

職場における女性に対する考えとしては「できれば女性の上司は持ちたくない」「自分の意見をはっきり言う女性はつい敬遠してしまう」「女性には重要な仕事をまかせられない」「職場の中で女性は有能なパートナーにはなりえない」「女性は家庭のことをキチンとしてから仕事に出るべきだ」の5項目を足した尺度を作成した。

表8にあるように、職場の女性観が最も伝統的なのは香港 (12.65) であり、次いで上海 (12.16) である。反対に最も非伝統的なのは東京 (10.57) であった。香港在住男性の職場における伝統的な女性観の高さは他の都市在住男性と比較して統計的に有意であった。また、東京在住男性の職場における非伝統的な女性観に関しては、ソウル以外の都市とは有意な差があった。

表8 都市別 x 職場における女性観

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
東京	1000	10.5750	3.67776	.11630	10.3468	10.8032	5.00	20.00
ソウル	1000	11.0000	3.53192	.11169	10.7808	11.2192	5.00	20.00
台北	1000	11.2570	4.09777	.12958	11.0027	11.5113	5.00	20.00
上海	1000	12.1650	3.73949	.11825	11.9329	12.3971	5.00	20.00
香港	1000	12.6540	3.49407	.11049	12.4372	12.8708	5.00	20.00
合計	5000	11.5302	3.79114	.05361	11.4251	11.6353	5.00	20.00

**3. 性別役割分業観** [問7から尺度を作成、平均値が高いほど、性別役割分業観が伝統的である。]

この尺度は「男は外で働き、女性は家庭を守るべきである」「男は妻子を養うべきである」「子どもが3歳くらいまでは、母親は仕事を持たずに育児に専念すべきだ」「家事や子どもの世話は女性がするほうがよい」「高齢者介護は女性がするほうがよい」の5項目を足して作成した。表9に示すように、最も伝統的な性別役割分業観を持っていたのは上海在住の男性 (14.21) で、次が香港 (14.16) の男性であった。また、上海と香港の差は統計的に有意ではなかった。反対に最も非伝統的であったのは東京在住の男性 (12.08) である。なお、上海と香港の男性と東京在住の男性の性別役割分業観の差は統計的に有意であった。

表9 都市別 x 性別役割分業観

度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間	最小値	最大値
----	-----	------	------	---------------	-----	-----

					下限	上限		
東京	1000	12.0820	3.50279	.11077	11.8646	12.2994	5.00	20.00
ソウル	1000	12.2060	3.27327	.10351	12.0029	12.4091	5.00	20.00
台北	1000	12.3940	3.61328	.11426	12.1698	12.6182	5.00	20.00
上海	1000	14.2090	2.85262	.09021	14.0320	14.3860	5.00	20.00
香港	1000	14.1630	3.01654	.09539	13.9758	14.3502	5.00	20.00
合計	5000	13.0108	3.40262	.04812	12.9165	13.1051	5.00	20.00

#### 4. 協調性 [問8 (ア) (イ) (ウ) (オ) (カ)、数値が高いほど協調性が高い。]

「相手の立場にたって考えられる」「素直に謝ることができる」「自分と異なる意見を、受け入れることができる」「思いやりをもって人と接している」「人と協力できる」を足して協調性の尺度を作成した。表10に示すように、協調性が最も高いのは上海在住の男性(16.71)であり、次に高いのは台北(16.30)である。反対に最も協調性が低いのは東京在住の男性(14.51)で、東京の平均値は他の都市と比較して有意に低かった。

表10 都市別 x 協調性

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
東京	1000	14.5100	2.86498	.09060	14.3322	14.6878	5.00	20.00
ソウル	1000	15.6760	2.32861	.07364	15.5315	15.8205	6.00	20.00
台北	1000	16.3000	2.58896	.08187	16.1393	16.4607	5.00	20.00
上海	1000	16.7120	1.84186	.05824	16.5977	16.8263	9.00	20.00
香港	1000	15.4980	2.41906	.07650	15.3479	15.6481	5.00	20.00
合計	5000	15.7392	2.54513	.03599	15.6686	15.8098	5.00	20.00

#### 5. 感情表現 [問8 (ク) (ケ) (コ) (サ)、平均値が高いほど、自分の気持ちを他者に開示できる。]

「家族や周りの人に感謝の言葉をよく言う」「自分の素直な気持ちを他人によく話す」「悩みがあったら、気軽に誰かに相談する」「他人に弱音を吐くことがある」の4項目を足して尺度を作成した。比較した五都市在住の男性で最も自分の感情を表現することが多い傾向にあるのが、上海(11.69)で、次いで台北(11.63)と香港(11.35)であった。また、これら三都市間の差は統計的に有意ではなかった。反対に、最も感情表現が少ない傾向にあるのは東京(9.99)であり、他の都市との差は有意であった(表11)。

表11 都市別 x 感情表現

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
東京	1000	9.9960	2.52515	.07985	9.8393	10.1527	4.00	16.00
ソウル	1000	10.7530	2.18604	.06913	10.6173	10.8887	4.00	16.00
台北	1000	11.6330	2.57972	.08158	11.4729	11.7931	4.00	16.00

上海	1000	11.6890	1.88728	.05968	11.5719	11.8061	4.00	16.00
香港	1000	11.3500	2.31535	.07322	11.2063	11.4937	4.00	16.00
合計	5000	11.0842	2.39764	.03391	11.0177	11.1507	4.00	16.00

6. 孤独感・やる気・死にたい [問9、平均値が高いほど、孤独、やる気がしない、死にたいと感じた頻度が高い。]

これらの項目はそれぞれ「孤独だと感じたこと」「何もやる気がしないと感じたこと」「死にたいと思ったこと」の3項目について「よくあった」から「まったくなかった」までの4回答項目で尋ねた。

「孤独感」については、表12に示したように、香港在住(2.78)の男性が最も頻繁に感じていることがわかった。次に高いのはソウル(2.69)の男性であったが、香港との差は有意ではない。反対に孤独感を感じている頻度が少ないのは上海(2.40)や東京(2.51)の男性である。また、香港の男性と東京、台北、上海の男性たちとの孤独感の差は有意であった。

「やる気がしない」に関しても、香港在住(2.54)の男性が最も頻繁にやる気がしないと報告しており、次いで東京(2.49)の男性であった(表13)。しかし、香港と東京の対象者のやる気がしないに関する数値には統計的に有意な差は見られないが、両都市の平均値はソウル、台北、上海の男性と比較して有意に高かった。反対に上海(2.10)の男性はやる気がしないと感じている傾向が最も低い。

「死にたい」と思う頻度に関しては、香港(2.07)が最も高く、次がソウル(1.95)であり、反対に上海(1.49)が一番低い傾向にあった(表14)。また、香港とソウルの差は統計的に有意ではなかったが、他の都市とは有意な差が見られた。

これら3種類のネガティブな感情(孤独、やる気がしない、死にたい)については、香港在住の男性がもっとも頻繁に経験していることがわかった。また、ソウルと東京在住の男性もこのようなことを感じている頻度が高い傾向にある。逆に、上海在住の男性は全ての項目において、最も低い傾向にあることがわかった。

表12 都市別 x 孤独感

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
東京	1000	2.5090	.96791	.03061	2.4489	2.5691	1.00	4.00
ソウル	1000	2.6920	.84133	.02661	2.6398	2.7442	1.00	4.00
台北	1000	2.5360	.88515	.02799	2.4811	2.5909	1.00	4.00
上海	1000	2.4020	.88723	.02806	2.3469	2.4571	1.00	4.00
香港	1000	2.7800	.79134	.02502	2.7309	2.8291	1.00	4.00
合計	5000	2.5838	.88653	.01254	2.5592	2.6084	1.00	4.00

表13 都市別 x やる気がしない

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
東京	1000	2.4900	.97717	.03090	2.4294	2.5506	1.00	4.00
ソウル	1000	2.3590	.82753	.02617	2.3076	2.4104	1.00	4.00



台北	1000	2.3910	.88820	.02809	2.3359	2.4461	1.00	4.00
上海	1000	2.1040	.86945	.02749	2.0500	2.1580	1.00	4.00
香港	1000	2.5470	.84172	.02662	2.4948	2.5992	1.00	4.00
合計	5000	2.3782	.89517	.01266	2.3534	2.4030	1.00	4.00

表14 都市別 x 死にたい

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
東京	1000	1.8700	1.00504	.03178	1.8076	1.9324	1.00	4.00
ソウル	1000	1.9470	.90388	.02858	1.8909	2.0031	1.00	4.00
台北	1000	1.6400	.88724	.02806	1.5849	1.6951	1.00	4.00
上海	1000	1.4910	.79910	.02527	1.4414	1.5406	1.00	4.00
香港	1000	2.0650	.97454	.03082	2.0045	2.1255	1.00	4.00
合計	5000	1.8026	.93990	.01329	1.7765	1.8287	1.00	4.00

7. 暴力の加害・被害経験 [問10 (ア) (イ)、平均値が高いほど、暴力の加害・被害を経験した頻度が高い。]

「DV (配偶者や恋人への暴力) をふるったこと」(加害経験) と「DV (配偶者や恋人からの暴力を受けたこと) (被害経験) に対して「よくあった」から「まったくなかった」の4項目から選択して回答してもらった。

加害経験が最も多かったのは香港在住の男性であり (1.67)、次いでソウル (1.45) であった (表15)。しかし、香港とソウルの平均値の差は統計的に有意であった。最も低かったのは東京 (1.31) であるが、東京と台北と上海の差は有意ではなかった。

表16に示したように、加害経験と同様に被害経験が最も多かったのは香港在住の男性であった (1.62)。次はソウル (1.48) だったが、香港との差は統計的に有意であった。最も被害経験が少なかったのは台北 (1.31) であるが、東京と上海との差は有意ではなかった。

表15 都市別 x 暴力の加害経験

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
東京	812	1.3054	.69369	.02434	1.2576	1.3532	1.00	4.00
ソウル	897	1.4515	.77210	.02578	1.4009	1.5021	1.00	4.00
台北	896	1.3192	.77005	.02573	1.2687	1.3697	1.00	4.00
上海	918	1.3845	.79753	.02632	1.3329	1.4362	1.00	4.00
香港	871	1.6670	1.03026	.03491	1.5985	1.7356	1.00	4.00
合計	4394	1.4263	.83141	.01254	1.4017	1.4509	1.00	4.00

表16 都市別 x 暴力の被害経験

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
東京	812	1.3288	.71896	.02523	1.2793	1.3783	1.00	4.00
ソウル	897	1.4760	.78329	.02615	1.4247	1.5274	1.00	4.00
台北	896	1.3103	.74124	.02476	1.2617	1.3589	1.00	4.00
上海	918	1.3486	.75192	.02482	1.2999	1.3973	1.00	4.00
香港	871	1.6177	.96947	.03285	1.5532	1.6822	1.00	4.00
合計	4394	1.4165	.80628	.01216	1.3926	1.4403	1.00	4.00

7. 家事頻度 [問5 (ア) ~ (ク)、各回答項目の「ほとんど行わない」(0点) から「ほぼ毎日」(7点) を足して8 (項目数) で割り、範囲は週に0~7点として、高い数値ほど頻度が高い。]

家事の項目は「食事の用意」「食事のあとかたづけ」「食料品や日用品の買い物」「洗濯」「洗濯物をたたむ」「掃除 (部屋)」「掃除 (風呂)」「掃除 (トイレ)」を含む。これらの項目を足して家事頻度尺度を作成し、各都市間の差をみた。

表17に示したように、家事を最も頻繁にしていたのは上海の男性 (2.73) であり、次は台北の男性 (2.61) であったが、この差は統計的に有意ではなかった。東京在住の男性は2.42、ソウルは2.41、香港は2.34だったが、これらの三都市間の平均値の差は有意ではない。

表17 都市別 x 家事頻度

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
東京	1000	2.4150	1.81996	.05755	2.3021	2.5279	.00	7.00
ソウル	1000	2.4113	1.61761	.05115	2.3109	2.5117	.00	7.00
台北	1000	2.6131	1.80079	.05695	2.5014	2.7249	.00	7.00
上海	1000	2.7283	1.54138	.04874	2.6327	2.8240	.00	7.00
香港	1000	2.3388	1.76014	.05566	2.2295	2.4480	.00	7.00
合計	5000	2.5013	1.71698	.02428	2.4537	2.5489	.00	7.00

8. 育児頻度 (全体と末子年齢6歳以下) [問13-2 (ア) ~ (カ)、各回答項目の「ほとんど行わない」(0点) から「ほぼ毎日」(7点) を足し6 (項目数) で割ったので、範囲は週に0~7点となり、高い数値ほど頻度が高い。「あてはまらない」は欠損値とした。]

「食事の世話」「一緒に食事」「着替えや身支度の世話」「一緒にお風呂」「オムツやトイレの世話」「一緒に遊ぶ」を育児として含み、まずは子どもがいる男性全員を対象にして分析・比較した。その結果、台北在住の男性 (3.92) が最も頻繁に育児をしていることがわかり、その他の都市では、高い順に香港 (3.40)、上海 (3.30)、ソウル (3.06)、東京 (2.94) で、東京が最も低かった (表18)。また、台北の男性の育児参加頻度は他の都市の男性たちと比較すると有意に高いことがわかった。また、表19に提示したように、末子が6歳以

下の父親の場合でも、台北在住の男性が最も頻繁に育児をしていた（4.55）。次に高いのは香港（3.82）で、ソウルは3.54、東京と上海はともに3.35と最も低かった。なお、台北の平均値は他の都市の男性と比較して有意に高かった。これらの比較から、東京在住男性の育児参加頻度は他の東アジアの都市と比べて、低い傾向にあることが明らかになった。

表18 都市別 x 育児頻度（全体）

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
東京	220	2.9429	1.64904	.11118	2.7237	3.1620	.00	7.00
ソウル	278	3.0565	1.56895	.09410	2.8713	3.2418	.00	7.00
台北	405	3.9190	1.97476	.09813	3.7261	4.1119	.00	7.00
上海	465	3.2998	1.42780	.06621	3.1697	3.4300	.00	7.00
香港	346	3.3964	1.73630	.09334	3.2128	3.5800	.00	7.00
合計	1714	3.3804	1.71371	.04139	3.2992	3.4615	.00	7.00

表19 都市別 x 育児頻度（末子年齢6歳以下）

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
東京	88	3.3515	1.73510	.18496	2.9838	3.7191	.00	7.00
ソウル	105	3.5463	1.51930	.14827	3.2522	3.8403	1.00	7.00
台北	197	4.5547	1.92532	.13717	4.2842	4.8253	.43	7.00
上海	154	3.3516	1.39277	.11223	3.1299	3.5733	.00	7.00
香港	183	3.8247	1.73352	.12815	3.5719	4.0776	.64	7.00
合計	727	3.8248	1.75636	.06514	3.6969	3.9527	.00	7.00

**9. 介護頻度** [問14で「現在、中心となって介護している」と回答した人を対象に、問14-1の（ア）～（オ）を検討した。各回答項目の「ほとんど行わない」（0点）から「ほぼ毎日」（7点）を足し最小0点から35点にして、高い数値ほど頻度が高いとした。「あてはまらない」は欠損値とした。]

介護項目として含んだのは「介護（入浴、着替え、食事、排泄の手助けなど）」「家事援助（食事の準備、洗濯、掃除、その他の家事）」「外出時の付き添い、送迎」「（介護者の方の）お金の管理、介護サービスなどの手配・調整」「話し相手、見守り（他の項目をしながらの話し相手、見守りは含まない）」である。

表 20 に示したように、最も頻繁に介護をしているのは台北在住の男性（24.26）であり、高い順にソウル（22.10）、東京（21.41）、上海（21.08）、香港（19.89）であった。しかし、台北、ソウル、東京、上海の男性間では統計的に有意な差がなく、唯一、有意な差があったのは台北と香港の男性間だけである。

表20 都市別 x 介護頻度

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
東京	33	21.4091	10.09444	1.75722	17.8298	24.9884	2.00	35.00
ソウル	21	22.0952	11.32102	2.47045	16.9420	27.2485	1.00	35.00
台北	134	24.2575	10.66047	.92092	22.4359	26.0790	3.00	35.00
上海	126	21.0754	7.67830	.68404	19.7216	22.4292	5.50	35.00
香港	182	19.8901	9.82437	.72823	18.4532	21.3270	.00	35.00
合計	496	21.5655	9.77495	.43891	20.7032	22.4279	.00	35.00

#### IV. 都市別の共分散構造分析の結果

分析対象を「既婚子どもあり」「既婚子どもなし」「独身子どもなし」の3グループに分け、分析モデル図にもとづき、各国別に共分散構造分析を行なった。この分析モデルでは、本プロジェクトで焦点をあてた「新しい男性の役割」として従属変数には家事と育児頻度を含んだ。また、独立変数には主な属性を投入して、仕事での競争意識、職場における女性観、家庭における性別役割分業観を媒介変数とした。以下に統計的に有意な結果が出た変数間の関係を示していく。分析結果の詳細およびモデルの適合度は別表（表 21・表 22・表 23）を参照されたい。

##### 1. 既婚子どもありの結果

「既婚子どもあり」グループの分析モデルを図5に示す。分析結果のまとめは以下に都市ごとに記すが、結果の詳細およびモデルの適合度は表 21 を参照のこと。

###### (1) 東京 (N=332)

- ① 潜在変数間の関係：「職場の女性観」が伝統的なほど「家事の実施頻度」が高くなる（標準化係数<以下同様>.230）。
- ② 「仕事での競争意識」は、「本人の収入」が多いほど(.192)、「末子年齢」が高いほど上昇し(.331)、「本人の年齢」が高いほど低下する(-.482)。
- ③ 「職場の女性観」は、「本人の収入」が多いほど(-.124)、「本人の年齢」が高いほど平等的になるが(-.368)、「末子年齢」が高いほど伝統的になる(.310)。
- ④ 「家庭における性別役割分業観」は、「子ども数」が多いほど(.200)、「末子年齢」が高いほど伝統的になるが(.382)、「本人の年齢」が高いほど(-.376)、「配偶者の収入」が多いほど平等的になる(-.219)。
- ⑤ 「家事の実施頻度」については、「子ども数」が多いほど低くなるが(-.157)、「配偶者の収入」が多いほど高くなる(.293)。
- ⑥ 「育児の実施頻度」は、「末子年齢」が高いほど減少する(-.436)。

###### (2) ソウル (N=418)

- ① 潜在変数間の関係：「職場の女性観」が伝統的なほど「家事の実施頻度」が高くなる(.322)。
- ② 「仕事での競争意識」は、「末子年齢」が高いほど(.326)、「配偶者の学歴」が高いほど上昇するが(.136)。

「本人の年齢」が高いほど低下する(-.338)。

- ③ 「家庭における性別役割分業観」は「配偶者の収入」が多いほど平等的になる(-.168)。
- ④ 「家事の実施頻度」は「本人の年齢」が高いほど減少するが(-.209)、「配偶者の収入」が多いほど高くなる(.202)。
- ⑤ 「育児の実施頻度」は「末子年齢」が高いほど(-.266)、「本人の年齢」が高いほど減少する(-.234)。

(3) 台北(N=443)

- ① 潜在変数間の関係：「職場の女性観」が伝統的なほど「家事の実施頻度」が高くなる(.181)。
- ② 「仕事での競争意識」は、「本人が就業している人」(.131)、「本人の収入」が多いほど(.315)、「配偶者の学歴」が高いほど上昇する(.132)。
- ③ 「職場の女性観」については、「配偶者の収入」が高いほど平等的になる(-.546)。
- ④ 「家庭における性別役割分業観」は、「本人の収入」が多いほど(.254)、「本人の年齢」が高いほど伝統的になるが(.176)、「配偶者の収入」が多いほど平等的になる(-.744)。
- ⑤ 「家事の実施頻度」については、「本人の収入」が多いほど(.205)、「配偶者の収入」が多いほど高くなる(.516)。
- ⑥ 「育児の実施頻度」は、「末子年齢」が高いほど(-.406)、「本人の学歴」が高いほど減少するが(-.139)、「配偶者の収入」が多いほど高くなる(.437)。

(4) 上海(N=591)

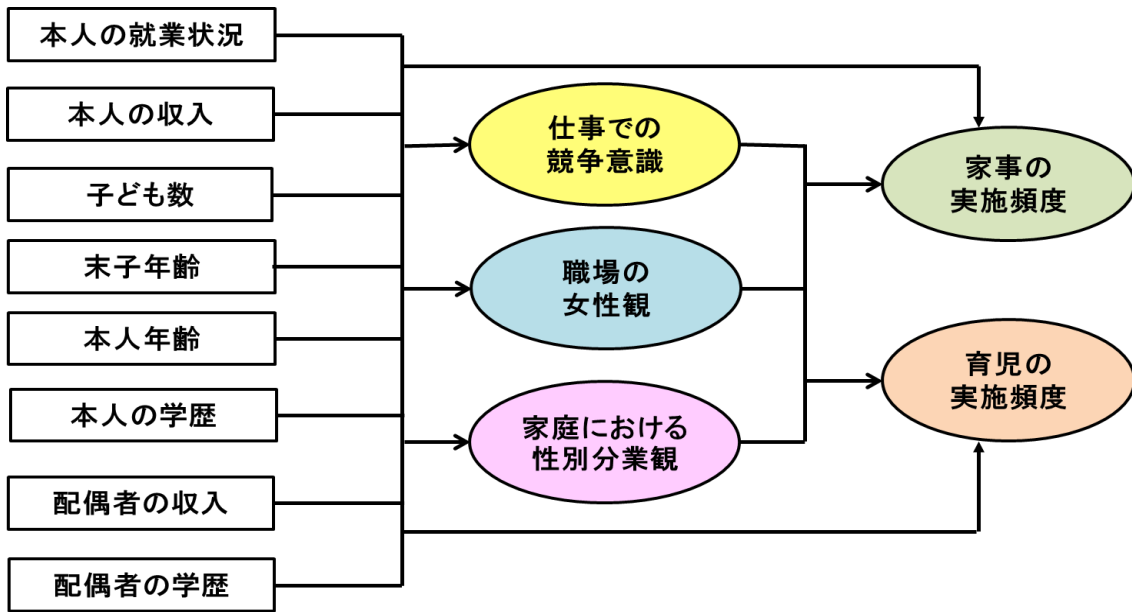
- ① 潜在変数間の関係：「職場の女性観」が伝統的なほど「家事の実施頻度」は高くなり(.383)、「育児の実施頻度」も高くなる(.350)。「家庭における性別分業観」が伝統的なほど「家事の実施頻度」は減少し(-.319)、「育児の実施頻度」も減少する(-.326)。
- ② 「仕事での競争意識」は、「本人の収入」が多いほど上昇し(.445)、「本人の年齢」が高いほど低下する(-.331)。
- ③ 「職場の女性観」については、「本人の収入」が高いほど平等的になり(-.140)、「子ども数」が多いほど伝統的になる(.091)。
- ④ 「家事の実施頻度」については、「配偶者の収入」が多いほど(.191)、「配偶者の学歴」が高いほど高くなる(.152)。
- ⑤ 「育児の実施頻度」は、「本人の年齢」が高いほど減少する(-.231)。

(5) 香港(N=399)

- ① 潜在変数間の関係：「仕事での競争意識」が高いほど「家事の実施頻度」は高くなる(.129)。「職場の女性観」が伝統的なほど「家事の実施頻度」は高くなり(.459)、「育児の実施頻度」も高くなる(.469)。「家庭における性別分業観」が伝統的なほど「育児の実施頻度」は減少する(-.187)。
- ② 「仕事での競争意識」は「本人の年齢」が高いほど低下する(-.264)。
- ③ 「職場の女性観」は「本人の年齢」が高いほど平等的になる(-.333)。
- ④ 「家庭における性別役割分業観」は「本人の年齢」が高いほど低下する(-.263)。
- ⑤ 「家事の実施頻度」については「本人の収入」が高いほど(-.157)、「本人の年齢」が高いほど減少するが(-.159)、「配偶者の収入」が多いほど高くなる(.143)。

⑥ 「育児の実施頻度」は、「末子年齢」が高いほど減少する(-.248)。

図 5 既婚子どもありの分析モデル



## 2. 既婚子どもなしの結果

「既婚子どもなし」の分析モデルを図 6 に示す。本モデルは、既婚子どもありの分析モデル(図 5)をもとに、子どもに関する独立変数および育児の実施頻度に関する潜在変数を除いたものである。以下に都市別に分析結果を述べる。結果の詳細およびモデルの適合度は別表(表 22)を参照されたい。

### (1) 東京 (N=110)

- ① 潜在変数間の関係: 「仕事での競争意識」が高いほど「家事の実施頻度」は高くなる(.242)。
- ② 「仕事での競争意識」は、「本人が就業している人」(.242)、「本人の学歴」が高いほど上昇する(.316)。
- ③ 「職場の女性観」については「配偶者の収入」が多いほど平等的になる(-.222)。
- ④ 「家庭における性別役割分業観」は、「本人の年齢」が高いほど伝統的になるが(.241)、「配偶者の収入」が多いほど平等的になる(-.384)。

### (2) ソウル (N=96)

- ① 潜在変数間の関係: 統計的に有意な関係は見いだせなかった。
- ② 「家事の実施頻度」については「本人の年齢」が高いほど減少する(-.282)。

### (3) 台北 (N=166)

- ① 潜在変数間の関係: 「仕事での競争意識」が高いほど「家事の実施頻度」は高くなり(.202)、「職場の女性観」が伝統的なほど「家事の実施頻度」は高くなる(.439)。
- ② 「家庭における性別役割分業観」は、「本人の収入」が多いほど伝統的になるが(.228)、「本人の年齢」が高いほど(-.251)、「本人の学歴」が高いほど平等的になる(-.207)。

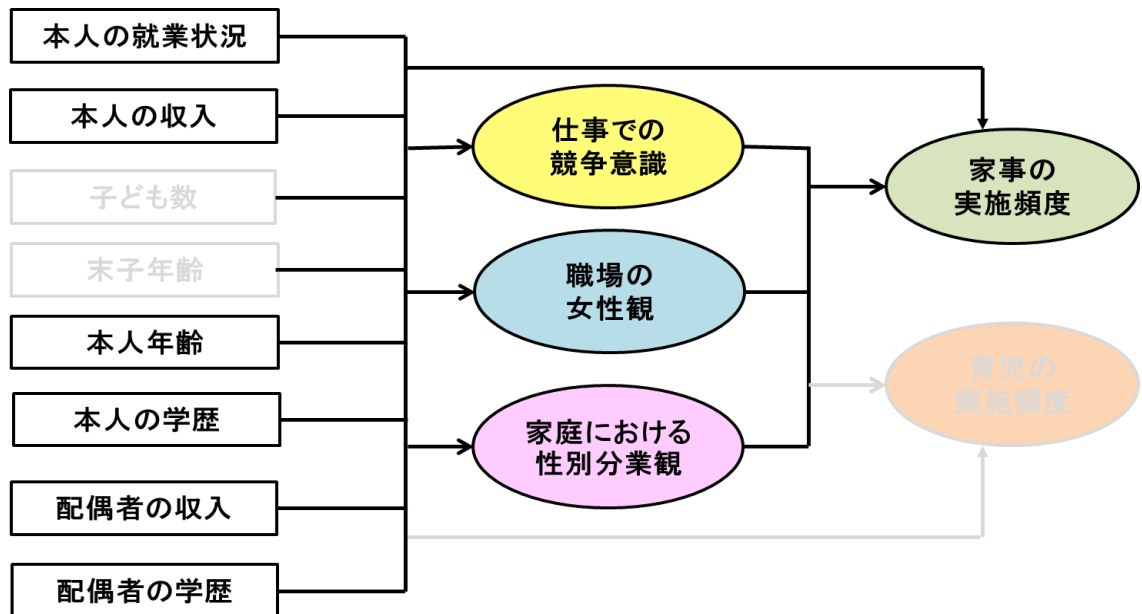
(4) 上海 (N=112)

- ① 潜在変数間の関係：「職場の女性観」が伝統的なほど「家事の実施頻度」は高くなる(.492)。
- ② 「家庭における性別役割分業観」は「本人の年齢」が高いほど平等的になる(-.264)。
- ③ 「家事の実施頻度」は「本人の年齢」が高いほど減少する(-.206)。

(5) 香港 (N=206)

- ① 潜在変数間の関係：「職場の女性観」が伝統的なほど「家事の実施頻度」は高くなる(.381)。
- ② 「仕事での競争意識」は「本人の学歴」が高いほど上昇するが(.208)、「本人の年齢」が高いほど(-.324)、「配偶者の学歴」が高いほど低下する(-.262)。
- ③ 「職場の女性観」は「配偶者の収入」が多いほど平等的になる(-.223)。
- ④ 「家庭における性別役割分業観」は「配偶者の収入」が高いほど(-.196)、「配偶者の学歴」が高いほど平等的になる(-.205)。
- ⑤ 「家事の実施頻度」は「本人の年齢」が高いほど減少する(-.206)。

図6 既婚子どもなしの分析モデル



3. 独身子どもなしの結果

「独身子どもなし」の分析モデルを図7に示す。本モデルは、既婚子どもありの分析モデル(図5)をもとに、子ども・配偶者に関する独立変数および育児の実施頻度に関する潜在変数を除いたものである。以下に都市別に分析結果を述べる。結果の詳細およびモデルの適合度は別表(表23)を参照のこと。

(1) 東京 (N=535)

- ① 潜在変数間の関係：「仕事での競争意識」が高いほど「家事の実施頻度」は高くなる(.189)。
- ② 「仕事での競争意識」は、「本人が就業している人」(.117)、「本人の学歴」が高いほど上昇するが(.096)、「本人の年齢」が高いほど低下する(-.253)。
- ③ 「職場の女性観」については「本人の収入」が多いほど伝統的になる(.163)。

④ 「家事の実施頻度」は「本人が就業している人」が高くなる(.104)。

(2) ソウル (N=468)

① 潜在変数間の関係：「仕事での競争意識」が高いほど(.129)、「職場の女性観」が伝統的なほど「家事の実施頻度」は上昇する(.156)。

② 「仕事での競争意識」は「本人が就業している人」(.135)、「本人の学歴」が高いほど上昇するが(.146)、「本人の年齢」が高いほど低下する(-.148)。

③ 「家事の実施頻度」については「本人の学歴」が高いほど高くなる(.106)。

(3) 台北 (N=364)

① 潜在変数間の関係：「仕事での競争意識」が高いほど「家事の実施頻度」は高くなり(.217)、「職場の女性観」が伝統的なほど「家事の実施頻度」は高くなる(.298)。

② 「仕事での競争意識」は、「本人が就業している人」(.123)や「本人の収入」が多いほど上昇するが(.152)、「本人の年齢」が高いほど低下する(-.148)。

③ 「職場の女性観」は「本人が就業している人」で伝統的になる(.115)。

④ 「家庭における性別役割分業観」は、「本人が就業している人」(.162)や「本人の年齢」が高いほど伝統的になるが(.169)、「本人の学歴」が高いほど平等的になる(-.123)。

(4) 上海 (N=247)

① 潜在変数間の関係：有意な関係は見いだせなかった。

② 「職場の女性観」は「本人の収入」が多いほど伝統的になる(.252)。

③ 「家庭における性別役割分業観」は「本人が就業している人」(.141)、「本人の収入」が多いほど(.192)、「本人の年齢」が高いほど伝統的になる(.227)。

④ 「家事の実施頻度」は「本人の学歴」が高いほど減少する(-.159)。

(5) 香港 (N=361)

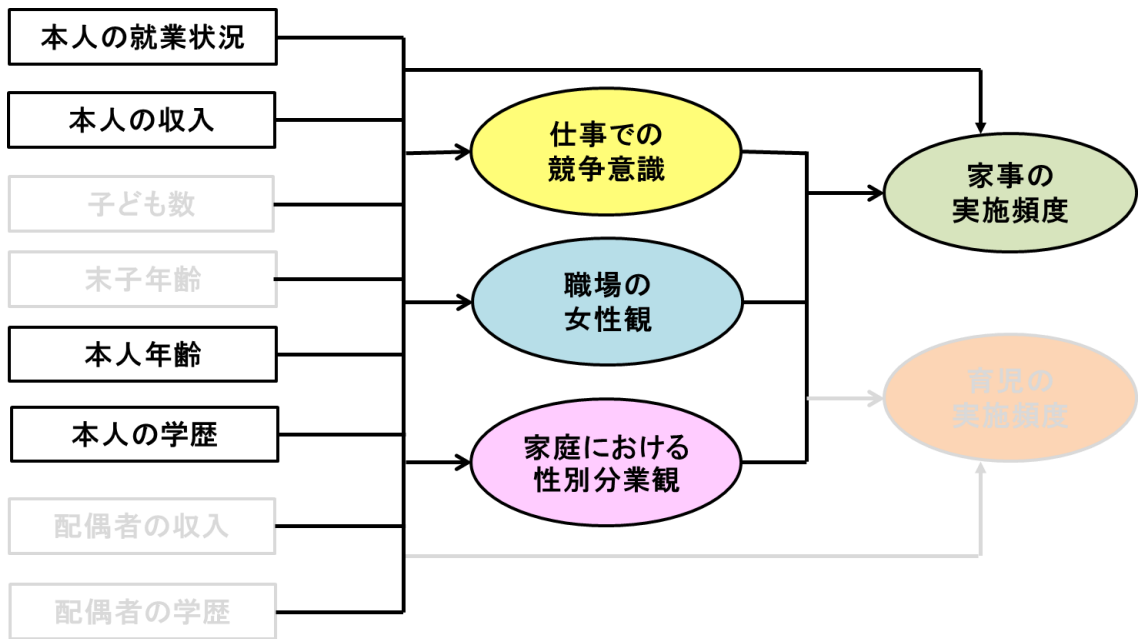
① 潜在変数間の関係：「仕事での競争意識」が高いほど(.149)、「職場の女性観」が伝統的なほど「家事の実施頻度」は高くなる(.329)。

② 「仕事での競争意識」は「本人が就業している人」(.168)や「本人の学歴」が高いほど上昇する(.124)。

③ 「家事の実施頻度」は「本人の収入」が多いほど高くなるが(.162)、「本人の学歴」が高いほど減少する(-.150)。



図 7 独身子どもなしの分析モデル



## V. 分析結果のまとめ

本プロジェクトでデータを収集したサンプルの特性としては、第1に、各都市で年代は30代から40代が半数を占めていることである。第2に、最終学歴は大学という高学歴が4割強から6割超いて、常時雇用者も5割～6割と多い。第3に、一日平均の労働時間は8～9時間で、都市別の違いはあまりない。よって、全都市のサンプルの特徴としては、高学歴で安定した職業に就いている男性が多いということだ。これらの特徴はWEB調査を使ったデータ収集法からの影響を受けているのではと推測される。

各都市間で目立った相違点としては、東京とソウルでは「独身子どもなし」が最も多かったが、台北、上海、香港では「既婚子どもあり」が多かったことである。また、年収に関しては、東京の配偶者間のギャップが約300万と一番大きく、台北では約30万、ソウルと上海は約100万、香港では約145万であった。

以下では主な結果として主要変数の記述統計を都市別に比較して、更に多変量解析から得られた因果関係に関する結果の都市別比較・検討を行う。

### 1. 主要変数の比較（記述統計）

以下では、概念に外枠を付け、各項目で最も高い場合は二重下線、最も低い場合は下線を引いて示した。

- (1) 全都市の**職場における競争意識**は高い傾向ではあるが、この意識が最も高いのは上海の男性であり、一番低いのは東京在住者である。
- (2) **職場における女性観**について、最も伝統的なのは香港在住男性であり、最も非伝統的なのは東京在住男性であった。
- (3) **性別役割分業観**が最も伝統的であったのは上海在住者で、最も非伝統的なのは東京の男性であった。

- (4) **協調性**が高いのは上海と台北の男性で、低いのは東京の男性であった。
- (5) **感情表現**（自分の気持ちを他者に開示できる）を最も頻繁にしている傾向を示したのは上海と台北の男性で、最も少ない傾向にあるのは東京の男性であった。
- (6) **孤独感、やる気がしない、死にたい**などのネガティブな感情を最も頻繁に持っているのは、香港の男性であった。
- (7) **暴力の加害経験と被害経験**が最も多かったのは香港の男性であり、加害経験が最も少ないのは東京、被害経験が最も少ないのは台北の男性であった。
- (8) **家事頻度**が最も高いのは上海の男性で、低いのは東京、ソウル、香港在住者であった。
- (9) **育児頻度**が最も高いのは台北の男性で、最も低いのは東京在住者であった。
- (10) **介護頻度**が最も高いのは台北の男性で、最も低いのは香港在住者であった。

これらの記述統計結果から各都市の男性の特徴は以下のようにまとめることができる。

- 東京の男性は職場における競争意識が低く、協調性と感情表現が弱く、職場における女性観と性別役割分業観が非伝統的な傾向であるにもかかわらず、家事や育児の頻度は低い。
- 上海在住の男性は職場における競争意識が高く協調性や感情表現も高い。また、性別役割分業観は伝統的ではあるが、家事参加は頻繁にしている傾向にある。
- 香港の男性は職場における女性観が伝統的であり、孤独感、やる気がしない、死にたいなどの負の感情を抱いている傾向がある。また、暴力の加害と被害の経験も多い。
- ソウルの男性は他の東アジアの都市に住む男性と比較すると、上記の項目では常に中間に位置している傾向がある。
- 台北の男性は協調性が高く、感情表現ができる傾向にあり、家事と介護頻度が最も高い。

## 2. 因果関係の検討（共分散構造分析結果）

主要変数間の因果関係を検討するために行なった共分散構造分析のまとめとして、従属変数を家事頻度とした結果を「既婚子どもあり」「既婚子どもなし」「独身子どもなし」グループに分けてまとめる。育児頻度の結果については「既婚子どもあり」を対象として分析した結果をまとめる。また、これらのまとめを各都市間で比較する。最低三都市で共通している要因には二重線を引いた。

- (1) 各都市の既婚子どもあり男性の「**家事頻度**」を高めているのは以下の要因である。
- ① 東京：職場の女性観が伝統的であること、子ども数が少ないこと、配偶者の収入が多いこと。
  - ② ソウル：職場の女性観が伝統的であること、本人の年齢が低いこと、配偶者の収入が多いこと。
  - ③ 台北：職場の女性観が伝統的であること、本人の収入が多いこと、配偶者の収入が多いこと。

- ④ 上海：職場の女性観が伝統的であること、性別役割分業観が非伝統的であること、配偶者の収入が多いこと、配偶者の学歴が高いこと。
- ⑤ 香港：仕事での競争意識が高いこと、職場の女性観が伝統的であること、本人の収入が低いこと、本人の年齢が低いこと、配偶者の収入が高いこと。

以上をまとめると全都市において、共通して既婚子どもあり男性の家事参加頻度を高めているのは、職場の女性観が伝統的であることおよび配偶者の収入が多いことであった。

(2) 各都市の既婚子どもなし男性の「家事頻度」を高めている要因は以下である。

- ① 東京：仕事での競争意識が高いこと。
- ② ソウル：本人の年齢が低いこと。
- ③ 台北：仕事での競争意識が高いこと、職場での女性観が伝統的であること。
- ④ 上海：職場での女性観が伝統的であること、本人の年齢が低いこと。
- ⑤ 香港：職場での女性観が伝統的であること、本人の年齢が低いこと。

以上の結果から、東京以外の都市に在住する既婚子どもなし男性の家事参加頻度を高めているのは、職場の女性観が伝統的であることおよび本人の年齢が低いことであった。

(3) 各都市の独身子どもなし男性の「家事頻度」高めている要因は以下である。

- ① 東京：仕事での競争意識が高いこと、就業していること。
- ② ソウル：仕事での競争意識が高いこと、職場の女性観が伝統的であること、本人の学歴が高いこと。
- ③ 台北：仕事での競争意識が高いこと、職場の女性観が伝統的であること。
- ④ 上海：本人の学歴が低いこと。
- ⑤ 香港：仕事での競争意識が高いこと、職場の女性観が伝統的であること、本人の収入が高いこと、本人の学歴が低いこと。

以上をまとめると、上海以外の都市に在住する独身子どもなし男性の家事参加頻度を高めているのは、仕事での競争意識が高いことおよび職場の女性観が伝統的であることであった。

(4) 各都市在住の男性の「育児頻度」を高めている要因は、

- ① 東京：末子年齢が低いこと。
- ② ソウル：末子年齢が低いこと、本人の年齢が低いこと。
- ③ 台北：末子年齢が低いこと、本人の学歴が低いこと、配偶者の収入が高いこと。
- ④ 上海：職場の女性観が伝統的なこと、性別役割分業観が非伝統的なこと、本人の年齢が低いこと。
- ⑤ 香港：職場の女性観が伝統的なこと、性別役割分業観が非伝統的なこと。

これらの比較から見えてくる育児参加に関する共通した促進要因は、東京、ソウル、台北で末子年齢が低いことであった。他にも、本人の年齢が低いこと、職場の女性観が伝統的であり、性別役割分業観が非伝統的なことも一部の都市で共通して男性の育児を促す要因であった。